

# 平成26年度事業報告

## 1. 庶務事項

(1) 役員に関する事項（平成27年3月31日現在）

理事12名、監事3名  
評議員10名

(2) 職員に関する事項（平成27年3月31日現在）

場長以下職員18名  
参与1名、顧問1名

(3) 役員会等に関する事項

- イ. 平成26年5月13日(火)14:00-15:30 本部会議室 執行役員会  
経営改善問題について
- ロ. 平成26年6月16日(月)10:00-12:00 JRL 顧問室 執行役員会
  - 1) 6月23日開催理事会および評議員会の議題について
  - 2) 神津牧場の経営改善問題について
- ハ. 平成26年6月16日(月)13:00-14:00 N&N 事務所 監事会監査  
平成25年度事業報告及び収支に関する決算報告の監査
- ニ. 平成26年6月23日 14:00-16:00 蚕糸会館 理事会及び評議員会  
平成25年平成25年度事業報告及び収支に関する決算報告ほか
- ホ. 平成26年6月23日 16:00-16:30 蚕糸会館 臨時理事会  
代表理事等の選任ほか
- ヘ. 平成26年9月12日 14:00-16:30 静岡銀行東京支店会議室 執行役員会  
経営改善問題、友の会設立構想ほか
- ト. 平成26年11月12日 15:00-16:00 神津牧場 執行役員会  
平成26年度中間事業報告ほか
- チ. 平成26年11月17日 14:00-15:00 蚕糸会館会議室 第2回理事会  
平成26年度中間事業報告、定款変更（議事録署名人）ほか
- リ. 平成27年2月27日 11:00-14:00 本部 執行役員会  
平成27年度事業計画及び収支予算書ほか
- ヌ. 平成27年3月5日 14:00-15:00 蚕糸会館 第3回理事会  
平成27年度事業計画及び収支予算書ほか
- ル. 平成27年3月20日 14:00-15:00 蚕糸会館 第2回評議員会  
平成27年度事業計画及び収支予算書ほか

(4) その他

なし

## 2. 事業に関する事項

### <一般経過報告>

牧場を取り巻く情勢として、平成26年度は4月1日より消費税の増税が開始され、同時にこれまでの高速道路のETC割引が縮小され増税不況が懸念された。一方、当地では6月21日に「富岡製糸場と絹遺産群」が世界遺産に登録され、牧場近くの「荒船風穴」も構成資産として大いに注目を浴びることとなった。この世界遺産効果に期待を寄せ、ミント味の風穴ソフトなどの新商品を開発するなど、対応した販売を試みた。こうした試みは一定の成果を上げ、地元の話題づくりにも貢献した。ところが、6月の長雨により月末に県道44号下仁田浅科線と旧国道254号線が交差するところで、地滑りが発生し、7月4日から通行止めとなった。牧場の進入路の要となる地点でもあるため、死活問題ともなる場所である。早急な復旧を土木事務所に要請したが、自然災害のため復旧には長期間の工事が必要とのことであった。次善の対応策として、迂回路の確保を要請し旧国道254号線と長野方面から県道44号線の整備が行われたが、大型車の通行ができなくなったことやカーナビでの通行止め表示の影響で来場者に大きな影響を受けた。結果としては消費税と地滑り、天候不順の影響は大きく、夏の牧場来場者の減少をもたらした。荒船風穴の世界遺産効果も期待したほどではなかった。秋以降は一定の回復傾向は示したが全体の回復をするには至らなかった。

製酪工場の老朽化問題では、日本プロ農業支援機構（J-PAO）の助けを借りて、工場の更新についての資金調達等の検討の中で、経営改善の課題が指摘された。対応して、6次産業化中央サポートセンターからのコンサルタントの派遣をお願いし、マークデザインの統一などを進めた。在庫品の整理などの関係から段階的に新マークに移行しており、27年度にはほぼすべての主力商品が新デザインに代わる予定である。

新マーク開発と合わせて、販売力強化の方策として、直売（来場者の増加方策）、卸販売の回復、新規販路の開拓を試みた。来場者の増加方策としてはバス会社への営業の中で、昼食の受入体制の整備が課題となり、バーベキュー場の受入人数を100人規模に増加する準備を整えた。また、体験活動も集客の一環として、牧場のガイドツアーや夜の牧場体験などのメニューも実施した結果、非常に反応は良好であった。こうした牧場の新しい試みとこれまでの神津牧場の活動や商品はブランド力として有効に機能しているようで、本年もいくつかのメディアで取り上げられた。関西テレビ（7/15：世界遺産関連取材）、テレビ東京（7月：WBS；獣害について）、群馬テレビ（自転車）、日テレ「遠くへ行きたい」（11/23）、女性自身、茨城トヨタPR誌、上毛新聞の紹介記事取材、その他メディア取材等多数であった。

卸販売では卸先の商品動向の分析を行い、日販品、土産商品などの性格付けを明確にすることとした。この結果、チーズやバター（品不足の影響もあるが）、レトルトを卸商品とすることで、販売量が増加した。今後は供給量をいかに増やしていくかが課題となる。新規販路の開拓では商談会の参加や新たな営業活動を行ったが、（牧場の通販価格の引き上げ要求など）取引条件などが厳しいケースが多い。一方、道の駅などの新規開店に伴うソフトミックスの要望や富岡製糸場周辺でのソフトミックスの要望、菓子製造からの神津ジャーキー牛乳の要望、レストラン等からのバターの要望が増えつつある。結果として、売上では卸販売の回復が顕著であったが、直売の不振により全体としては昨年並みとなった。

施設の老朽化は今年も各所で現れてきている。7月に、パーラーのバルククーラーが故障、修理不能のため代替品で一時対応の上、12月に新製品と入れ替えた。また、牛乳の充填機が不調となり、メーカーからは修理不能とされる中でだままだまし使用している状態である。施設の老朽化対策は時間との戦いであることも肝に銘じなければならない。

放射能検査の関係から今年も5月19日の放牧開始となった。検査結果では一部に測定値が得られているが、基準値からは大幅に低い値となっており、経年的にも減少していることが示された。風評被害については昨年の交渉結果に基づいて、補償されることとなり、平成25年度の風評被害と放牧延期に伴う粗飼料購入費用として14,846,249円での補償となった。なお、次年度につ

いては風評被害の補償を取りやめたいとの申し出を東電から受けたが、被害実態の有無によって判断することを伝えた。

近年、牧場の粗飼料生産の低下が問題となってきている。その原因はシカの採食やイノシシの掘り返しによる獣害である。牧場では農研機構および麻布大学と連携し、個体数のモニタリングや被害の実態について調査研究を行っている。2010年の調査では食べられた草の額は1,759万円分にもものぼると推定されている。県の畜産課および自然環境課にこの被害実態について相談し、対策について要請を行った。平成27年度事業の中で牧場周辺の個体数密度の低減に向けた事業を行うことが示された。

地域との連携では「花まつり（5月18日；約1400人）」、「神津荒船もみじ祭（10月18・19日）」といった直接の牧場イベントを町の観光協会、商工会（青年部、女性部）など各種団体の協力を得て実施した。町の行事としては例年の下仁田ねぎ祭・農業祭に代わって、「全国ねぎサミット（11月22・23日）」が行われ、参加したほか、「富岡製糸場記念イベント（10月4・5日）」、「県畜産フェスティバル（10月25・26日）」、「下仁田町商業祭（11月2日）」、「南牧村農業祭（11月16日）」、「長野牧場祭り」などの地域の行事にも積極的に参加した。

研修では例年通り、大学生、農林大学生、高校生、専門学校生などの実習生（11機関33人）を受入れた。

畜産の理解醸成と牧場の多面的機能の発現のための活動として行っている体験は、土曜、日曜には乳搾り体験とバター作り体験を一般来場者を対象に実施しているが、これに加えて、昼間のガイドツアーを行った。これは午前中に、放牧地へ行って、牧場についての説明と牛とのふれあいを行う45分程度のガイドツアーである。人数に限りがあるが、比較的好評であった。こうしたガイドツアーを今後充実させてゆく必要があると感じられる。また、開催日をかぎって、夜の牧場体験を実施したが、参加者の満足度は非常に高かった。

本年は体験・広報を担当していた職員が結婚のため退職（3月31日）し、臨時職員となったが、6月に出産のため退職した。これまで働いていた臨時職員を採用（4月1日）した。また、10月にロッジの職員が不慮の死となり退職、2月末に牛舎職員が定年退職（再雇用）、3月末に牛舎職員が私事により退職となった。4月からはロッジと牛舎と各1名補充を決定した。

## ＜公益事業 I：ジャージー種牛の放牧酪農経営における6次産業化モデルの構築に関わる調査・実証・研修事業＞

### 1) ジャージー種牛の飼養事業

#### (1) 草地管理及び飼料生産事業

本年は、一番草の収穫を6月3日からおこなったが、峠地区まで含めて一番草が終了したのは7月15日までかかり、ほぼ順調であった。二番草については7月下旬から開始し、9月中旬(一部10月)までかかった。そのまま三番草も順次(10月下旬まで)収穫したが、二番草収穫が遅かった採草地では3番草を収穫するには至らなかった。収穫したロールバールの個数は648個で昨年より1個少なかった。しかし一昨年に比べれば21個の減少である。収穫したロールについて重量と乾物率を測定して乾物収量を算出したところ158tとなり、一昨年の187t、昨年の174tに対し減収傾向が顕著となった。このため、群馬県の玉村農業公社からイネホールクロップサイレージを購入した。本年度の自給飼料の自給率は、乾物ベースで43.5%、TDNベースで41.4%と減少傾向を示している。収量減の原因はシカ、イノシシによる食害と掘り返しと考えられる。

草地管理については、肥料の高騰を契機に化成肥料の施用を止めて、採草地については堆肥を重点的に施用した。

堆肥生産は、昨年の大雪で、堆肥舎がつぶれたためにインパクトエアレーションによる堆肥化ができず、切り返しによる堆肥づくりを行った。全量を草地内に施用した。

本年度も、朝・晩の放牧毎に入退牧前後にライジングプレートメータによって草量を測定し、採食量の把握に努めた。今年度は全期間にわたって、採食量の変化は少なく低位安定であった。にもかかわらず、乳量は例年同様に、春から夏にかけては増加し、9月以降は減少した。今後、放牧地での乳量減の原因究明と草量確保の方策を検討する。また、年次間変動等を明らかにしていきたい。

#### (2) 放牧飼養技術の確立及び乳牛改良・種畜供給事業

前述したように、本年度も搾乳牛の早期放牧が実施できず、放牧開始は5月中旬までずれ込んでしまった。一方、秋期は補給を行いながら最終的には12月はじめまで放牧した。峠地区への放牧は、雄の育成(肥育素牛)、桶萱地区は受託牛および育成牛群、本部地区は搾乳牛群であることは例年通りであった。

成牛は、年度始め82頭で始まり、初妊牛からの繰り上がりが18頭、事故・出荷等による淘汰が23頭で、年度末には77頭を次年度へ繰り越した。

育成雌牛の払下は17頭で、雄子牛の払下はなかった。分娩は82頭の予定であったが、実際は雌31頭、雄37頭、うち死産9頭であった。合計68頭の出生であった。

搾乳量は、4、5月と1～3月はほぼ予定量を維持したが、6月～12月は前年比で10%ほど減収した。年間総搾乳量は359トンで、昨年同様の大幅な減少であった。搾乳牛率は平均86.2%であったが、9月～12月は目安の85%を下回った。引き続き空胎日数の改善などが必要である。初妊牛の増加によるものと思われる。

牛群検定の補正乳量は、5,022kg(4,892kg)で昨年度より130kg増加している。農水省の家畜改良増殖目標の6,500kgにはかなり及ばない状況であるが、放牧をしていることを考慮すれば適当な乳量であろう。個体ごとにみると、年間乳量の最高は7,684kgで、5,000kgをこえるものは12頭となった(昨年16頭)。しかし、極端に多いもの、少ないものがなく、安定した牛群となっている。乳質の推移は例年ととくに変わりなかった。

BLV(白血病)については、今年度も農研機構の白石氏および群馬県西部家畜保健衛生所と共同で媒介昆虫のアブをトラップする試みを行い、場内に25個のアブトラップを設置して種類と発生時期の把握を行った。本年度も多数のアブが捕獲された。BLV陽転は1昨年度は5頭。昨年度は0頭、本年度は1頭の陽転(?)がみられた。対策として淘汰の前倒しを行うなど、BLV根絶に向けた取り組みを行っており、さらに、農研機構の動物衛生研究所の小西氏とも連携し

て取り組みを強化している。現段階での成果は公表されている。BLVに関する取り組みは、ホームページでも公開した。

この他、昨年より「神津牧場におけるジャージー牛の遺伝的変遷に関する研究」を東京農業大学畜産学研究室と共同で行っており、本年も継続している。

### **(3) 放牧受託（公共育成牧場）事業**

育成受託牛は4月22日から例年通り受け入れたが、放牧自粛によって、5月13日まで放牧開始が遅れた。本年は長野県からの8頭で、すべてジャージー種であった。平均体重は280.8kgであった。しかし、この内1頭が5月にピロプラズマ病により退牧した。10月21日の退牧時は323kgでDGは0.23kg/日で、昨年よりも低かった。本年も夏の猛暑が激しかったが、比較的順調に増体した。人工授精は7頭全頭について実施し、5頭で妊娠確認が得られた。

## **2) 畜産物の利用・加工技術の開発事業**

### **(1) 乳製品の利用・加工技術の開発事業**

酪農業における6次産業化の中核を成すのは乳製品の加工によるプレミアム化で、多様な乳製品、特徴ある乳製品を作出することが求められる。当牧場は、放牧とジャージー牛という他にあまり類をみない特徴と、高品質牛乳をコンセプトにプレミアム化を図ってきたが、その維持・発展に力を注いでいる。中心的な酪製品は例年と変わらず、パック牛乳、アイスクリーム、ソフトクリーム、バター、チーズ、ヨーグルトなどで、それらの加工製造について、技術開発と製造を行っている。

今年度の加工部門の受入乳量は、359.7t（前年350.8t、1昨年391.1t）で、牛乳としての仕向けは64.8t（前年62.7t、1昨年55.6t）、アイスクリームは0.3t（前年0.5t、1昨年1.1t）、ソフトクリームは71.8t（前年69.0t、1前年66.6t）、バターは81.5t（前年58.3t、1昨年64.5t）、チーズは17.7t（前年18.8t、1昨年7.6t）、ヨーグルトは23.2t（前年27.6t、1昨年31.2t）で、残りの101.0t（前年113.8t、1昨年164.4t）は生乳として出荷した。

本年度の特徴はバターとチーズが伸びたことである。バターは秋から品不足が顕著になり、需要が増加した。チーズは昨年からの新製品開発によって売れ行きが増加したことによるものである。主力のソフトクリームについては、荒船風穴の世界遺産登録に対応した風穴ソフトを発売したこともあり、やや増加した。一方、アイスクリームは委託製造という事情もあり、供給面で制約された。今後も新たな製品開発を行い、試作販売を行っていく。

### **(2) 肉用肥育・加工事業**

神津牧場の潜在資源として”肉”部門の活用については本年度も継続して、進めている。

一つは、去勢牛の放牧肥育の牛肉については、放牧効果を維持した4か月仕上げで、1か月に2.5頭のペースでレストラン等に出荷を維持した。

鉄板焼きコーナーでのバター焼きも来場者にコンスタントに支持されている。

この放牧牛肉の利用を拡大するために、串焼き、煮込み、挽き材（ハンバーグ）にして利用することを継続し、対面販売での評価は高く、通販での販売を図るため、煮込みのレトルト化を行った。この老廃牛活用のレトルト「神津牧場ジャージービーフのカレー、ハヤシ、シチュー、煮込み」の販売は引き続き順調である。

この他、牛肉の加工品として、サラミ、パストラミ、ジャーキーなどの新商品も開発して販売を行っている。

### **(3) 放牧養豚事業**

バター製造の副産物である脱脂乳の有効利用を図るため、放牧飼養の豚に給与することによる有効活用については本年度も実施した。5月と9月に子豚を導入し、3か月で100kgにして屠殺し、ソーセージ・ハム等に加工し、場内・通販で販売した。特に、お歳暮、お中元として通販による評価が高く品薄となる。場内での対面販売でも支持されている。

### **(4) 実習生・研修生の受入れ事業**

大学生等の実習生は例年、7月から9月の夏休み期間が中心であるが、1昨年には6月から11月まで、さらに3月に希望者がおり、今年は12月にも希望者がおり広がりを見せている。今年

は研修寮の受入人数が少なくなったこともあって、一つの大学からの受け入れ人数を制限した。ために人数は33名、延べ人数は424名と昨年に比べて少なくなった。また、近年の傾向として、女子の実習生が増えて、男子が減っている。4大の学生が多いが、農業大学校や専門学校、農業高校などからも多くの実習生が来場している。農業大学校や専門学校生は長期間滞在する傾向が強く、熱心に学んで行く学生が多い。

## <公益事業 II：牧場の持つ多面的機能の発揮促進事業>

### (1) 牧場体験及び緑資源の高度利用

牧場での体験を通して、酪農・畜産の理解醸成を図るべく、本年度も例年と同様の様々な事業を実施した。バター作りや乳搾りなどの一般体験は、シーズンを通じて実施し、幼稚園・小中学校・高校・大学生などのほか、一般の来場者まで数多くの参加者があった。

1泊2日で、牛とのふれあいも含め、各種の体験をする企画は、本年度も「親子牧場体験」を群馬県畜産協会が主催する形(8/21; 40人)と牧場独自で行う形で7月(7/27; 5組14人)と8月(8/24; 1組5人)に実施した。非常に好評で、参加者の満足度は高かったと思われる。こうした機会をとらえて、牧場の歴史や酪農、畜産の理解を深める説明を行うとさらに満足度が増加することがわかった。

また、緑資源の高度利用に資するために、場内の生物多様性、特に野生動物の実態調査を本年度も継続して行った。畜草研の塚田氏によってカメラ・ビデオの設置による出現動物の調査を継続している。また、中央農研の竹内氏によって行われている、タヌキによる盗食を防止する試みでは、カーフハッチにおける盗食の実態把握として、ビデオカメラや赤外線ビデオカメラによる実態把握を行うと共に、盗食防止対策を試みている。ビデオカメラのデータはインターネット回線を通してリアルタイムで継続的に取得されている。この野生動物の調査によって得られた成果についてはホームページに順次公開していつているが、これらエコツーリズムの体験として、事業化することを目指して、麻布大学の南先生の協力の下に、体験学習の中に一部を取り込んだ。また、8月には麻布大の学生を対象に、4泊5日でフィールドワークを中心としたカリキュラムが行われる中で、学生実習や自然学習の場としての牧場利用の可能性があることが明らかとなった。そこで、これまでの牧場での体験プログラムと合わせて、牧場のガイドツアーや夜の牧場体験のプログラムを開発した。さらに、これまでのプログラムをさらにブラッシュアップして、プレスリリースを強化することで、集客を図った。今後、体験プログラムの実践をふくめて、プログラムの充実を図って行くこととした。

春の神津牧場花まつりと、秋の神津荒船もみじ祭りを例年のように開催したが、天気はよく、来場者は多数に上った。このほか、秋の収穫祭時期等には、地元の市町村等での行事にも参加し、バター作り体験や乳製品、肉製品のPRも例年通りに行った。

### (2) 家畜とのふれあい及び畜産理解醸成事業

ふれあい用として、山羊、うさぎ、ポニーの飼養、展示を行い、一般来場者に喜ばれた。一昨年度から実施している山羊のお散歩は子供達に人気があり、順番待ちもあることから時間制と少額の料金を取ることにした。

家畜改良センター長野支場から導入した山羊の増殖は順調に見えたが、秋口から病死がでて、その原因究明を急いでいる。山羊の園地管理は効果が大きく、親水公園の管理に有効である。この他、親水公園の隣接部分にドッグラン(無料)を設置した。

## 4) 共通事業

### (1) 副産物の払下事業

副産物の生乳は、牛乳として販売する他、バター、ソフトミックス、チーズ、アイスクリーム、ヨーグルトに加工し、農産物直売所、スーパー、デパート等への卸販売、牧場のロッジにおける直接販売、カタログ等による通信販売による払下事業を例年どおり実施した。

払下形態別の販売額のシェアを見ると、卸が79.4%(昨年77.3%; 一昨年79.1%)、ロッジが

14.6%（16.6%；15.3%）、通信販売が 6.1%（6.0%；5.6%）となっており、ほぼ前年並みとなっている。卸販売への依存度が高いが、昨年の卸販売の不振はやや回復している。

また、品目別のシェアをみると、ソフトクリームが約半分の 47.2%（昨年 47.6%；一昨年 49.5%）を占め、ついで牛乳の 20.9%（20.6%；18.8%）、ヨーグルトの 13.2%（15.2%；15.6%）、バターの 10.9%（9.3%；8.7%）とつづき、アイスクリームとチーズは 2.9 及び 5.0%に過ぎなかった牛乳の販売は全般に不振が継続しているが、東京カリンのジャージー牛乳ドーナツの売れ行きが好調で、販売量の低下を補完している。例年の如く、卸販売及びソフトクリームの販売に大きく依存している構造は変わらない。

本年度の卸部門の乳製品は二年続いた落ち込みからようやく回復する傾向が見られた（昨年比 111.3%）。通信販売も、昨年比 108.7%と増加している。群馬県内での秋から春に向けて開催される各種イベントや東京や各地のデパート等の催事には今年度も積極的に参加し、神津牧場乳製品の普及宣伝に努めた。

### <収益事業>

食堂は前年比 75%と落ち込んだが、宿泊は前年並み、鉄板焼は 95%は、売店も 71%の大幅な下落を示した。

宿泊はロッジの老朽化もあり、抜本的な改善が望まれているが、団体客の利用頻度を上げることや牧場体験とのタイアップによる増加が期待されている。また、最近では低価格の料金のせいもあり、口コミによるキャンプの希望者も増えてきている。

売店では牧場の牛乳やバターを使用したもの、地域の特産品など、牧場としての特徴を打ち出せるものに限定して特色を出しているが、そうした点を客に伝える努力や販売品の開発などにさらに努力する必要がある。

鉄板は料金設定を変更したことや食堂との分担を見直した。

<参考>

外部研究機関との共同研究による成果

下記のようにホームページで逐次成果を公表している。

外部研究機関との共同研究による成果			
神津牧場では、大規模牧場の経営管理技術に関する調査研究及び実証を行うという観点から、独立行政法人の研究機関、家畜改良センター及び大学との共同研究を実施している。			
No	研究課題名(内容)	共同研究機関	備考
1	無線トラクターによる傾斜地草地の管理技術	畜産草地研究所	*
2	草地管理技術の高度化(1)草地の植生調査及び収量調査の実施と飼料成分の測定	畜産草地研究所	*
3	草地管理技術の高度化(2)アルカン法を用いた牧草採食量の測定	日本大学	
4	土壌診断とそれに基づく施肥設計	畜産草地研究所	
5	野生動物調査及び獣害回避	畜産草地研究所・中央農業総合研究センター	*
6	BLV根絶のためのアブトラップ	東北農業研究センター	*
7	ロールベールサイレージの品質改善試験	畜産草地研究所	
8	インパクトエアレーション方式と廃菌床の利用による堆肥化	畜産草地研究所	
9	山羊を使った雑草管理の実証試験	家畜改良センター	
10	ジャージー牛の乳生産に影響を及ぼす栄養要因とその制御機能の解明	日本大学	
11	放牧ジャージー牛乳の機能性成分による高付加価値化	畜産草地研究所	
12	放牧ジャージー牛肉の機能性成分と肥育期間の短縮化	九州沖縄農業研究センター	
* : 研究課題名をクリックすると研究成果(pdfファイル)を参照できる。			



